

子育てと家族の役割分担〈第2回〉

専業主婦の場合

私は日本人で初めての「妊産婦のための雑誌」と、これもまた日本初の「老人介護雑誌」に関わり、これらの取材を、かけもちで行ってきた。仕事の性質上、家庭内に踏みこみ生、老、病、死に関する暮らしの現状を記事にしてきた。

どの分野の仕事にも言えることだと思うが「現場」は、物事の問題点や事物の核心に触れる光景などが、最も凝縮されているものである。「現場が一番ものの見える場所」というのが、私の実感であり、そのため私の仕事の姿勢は今でも「現場主義」に徹したところにある。

「家庭」は、何と言っても、人がこ

の世に生を受けてから、その魂の核の部分を支えていく「現場」の最先端と言っている。

ここで、「家庭」を自己実現の場として生きる「専業主婦」の立場を、少し時間軸を遡って伝えつつ、今日的な普遍の部分を書きたいと思う。

社会の変化に追いつけぬ家庭

「家庭」が豊かに落着いていなければ、大人にとっても、子どもにとっても人としての心に余裕も活力も生まれない。「家庭が大事」であることは、誰も否定しないが、多くの場合、その家庭が平和に動いていくためには、何よりも妻であり母である「主婦」の家

庭を守る。心が必要だと、そのように考えられてきた。

昭和の三〇年代、四〇年代のあたりまでに結婚した人達が一般的に認識していた「家庭」とは、「男は仕事」に勤しみ、妻が「家庭を守り、子を育てる」図式が主だった。夫は「家庭は妻に任せ」て、自分は「働く背中を妻子に見せていればいい」というスタイルのそれである。

私は昭和四〇年代の終わりから五〇年代、そして六〇年代へと現場を歩きながら、つくづく、そしてしみじみと「日本の家庭生活は、家事、育児を含め、多くが女性達の責任感と忍耐に支えられてきたのだな…」と感じ



浜 文子

詩人・エッセイスト

【はま ふみこ】出産・育児・教育・介護をテーマに取材・執筆・講演を行う。一貫して現場主義の視線で発信。著作物はNHKラジオ第2「私の本棚」でアンコール放送され、エッセイは高校入試国語科の問題に毎年使用されている。主著に「育母書」「祝・育児」「母になる旅」など他多数。

させられてきた。

もちろん、夫達も社会で生産力向上のため経済効果推進のため、必死で肉体と精神をフル回転させてきたことは、日本のこの間の経済成長を見れば分かる。

問題は、ヨレヨレ、ボロボロに疲れた切った身体を運んで帰宅する夫達は、家庭では抜け殻状態の心で妻に向き合うことになるという現実だった。

そのような多忙な夫と黙々と家を守る妻という家庭の図式の中で、「夫が会話してくれない」「一緒に外出してくれない」「育児に協力してくれない」といった慢性的な孤独感を抱えている妻たちは、ひとまとめにして「くれない族」と名づけられた。当時（昭和五九年）その呼称は流行語大賞をとったが、それは未成熟な主婦を総称して言うような風潮があり、その二年前に出版された孤独な主婦達の内面をドキュメントして描いた「妻たちの思秋期」（齋藤茂男著）も、話題にはなっただが、それは一つの時代の表情という捉えられ方でメディアに取り上げられるに過ぎなかった。私などが「世の中がこれで少しでも、家庭の妻たちの内面を大切に方向へと変化していくのか」と、期待したようには全く変わらなかった（男性の働き方も、社会が夫たちの目を家庭へと向ける動きも）。

このことは、以後私の中で、具体的な解決への方法論を見つけないままならぬという使命感を帯びたテーマになった。前掲書が家庭内の妻の孤独やアルコールに手を出さずにはいられない思いの実際を描いても「夫が企業戦士で家に帰れないのは結構なこと。妻も夫の稼いだ金で、趣味を持つたり、スポーツするなどの気分転換をすればいい」といった声は、私の周りの仕事仲間の男性達からも、かなり耳にした。

そんな声も一理あろうが、多くの主婦達はアルコール中毒には陥らないまでも、日頃のなんとなく晴れない気分や、整理するひき出しの見つからない漠然とした夫への不満や孤独感といったものを、言い当てられたようで、自分達の心の底の水脈と、このドキュメントに登場する主婦達の心の奥の水脈とが、間違いなく繋がっていることを確信したのである。私はそのことを取材先の同性達の沢山の声から実感していた。

産む性への敬意の見落とし

だが、「くれない族」「妻たちの思秋期」といったコトバが、どんなにメディアに登場しても、それでも当時は一向に新聞紙上の家庭面には「夫も育児に協力を」とか「妻と会話し、妻の心を知っておこう」とか、あるいは

「妻との一日二分の会話は二人の老後を決める」などという切り口の「夫婦」の向き合い方、歩み方を取り上げる内容のものは無かった。

なぜなのか――。答えは単純である。紙面を作るのは殆どが男性だから、家庭面は家事、料理、整理整頓の技術等々、ターゲットを女性にした。家庭は女性を守るものだ」という視線に満ちていた。日本の核家族が進んでいく中、妊娠から出産、育児の入口を見通すための目的から生まれた妊産婦雑誌で取材活動が続いているうちに、少しずつ少しずつ女性達の「生命を産むという性」の仕事が敬意を持って家庭内で大切にされないと、家全体の本当の幸せは真の意味で生きてこない：という確信が立ち上がっていった。そしてそれは、老後の夫への介護に向かう妻の心情にまで続く影響があるというこども。

「家庭の幸せ」の第一歩は、新しい家族に子どもを産み落とす妻の立場を、夫がよく理解し愛情を持ち出産の痛みに対する労いやねぎらい、敬意が無ければうまくいかない。この部分がないがしろにされ、夫の側にこの発想が全く無いと妻は心に欠落を抱えたまま「母」になることになり、生活を守り、育児に励む心に張り合いや気力を持ってなくなる。



抱／松永かの © (木版)

る夫には父になる心構えや家庭内で父親も知っておくべき育児の基本を記した父子手帳が必要だと確信した。その手帳があれば、妻や子、家庭全般への夫の側の参加意識が必ず芽生え、高まるに違いないと。子どもは女性一人が母になって迎えるのではない。男性も父になって迎えるものなのだ。「父子手帳が必要だ」との確信も「現場」の母達への長い取材から生まれたもので、私はそのことを関わりのあった出版社に訴えた。その訴えは、ある日突然、タイトルもそのままに大学教授(当時)の名で、その出版社から刊行されるといふ経過を辿った。すると、あらためて男性の育児休業が世の中で取り上げられ、何よりも大きい成果は、各地方自治体が、それぞれのネーミングで「母子手帳」と並行して父親用の冊子を配布するようになったこと。

「父親不在」は「夫不在」

よく、子どもの非行化が問題になったり、少年事件などが起こると、識者の論評に「父親不在の家庭の在りようが原因」などと言われ、「妻は夫を立て、子に父親を尊敬させるべき」等と言われ続けてきた。「子育てはキミに任せ」と言い切り、子どもが小さい時から一切子どもに関わらず、遊んでやらせ、絵本の一冊すら読み聞かせすることも無く、パチンコとオートバイに夢中、独身の時と全く変わらぬライフスタイルを通して居る父親も居るのだ。彼の息子が、中学二年で不登校になった時のこの父の第一声が、妻に対しての「おまえの教育がなってい

こうした「視点」が、新しく父親になる男性達へのアプローチとして欠落していたことが取材の中で見えてきたのである。数多くの「育児書」からも、この視点は抜けていた。「母である」ことは説かれても「母になる」ために女性に必要な配偶者のサポートについて記されたものはなかった。

日本初の「父子手帳」誕生の経緯

妊産婦雑誌に関わって十数年が経った頃にははつきりと、妊娠した女性に母子手帳が配布されるように父とな

る夫には父になる心構えや家庭内で父親も知っておくべき育児の基本を記した父子手帳が必要だと確信した。その手帳があれば、妻や子、家庭全般への夫の側の参加意識が必ず芽生え、高まるに違いないと。子どもは女性一人が母になって迎えるのではない。男性も父になって迎えるものなのだ。「父子手帳が必要だ」との確信も「現場」の母達への長い取材から生まれたもので、私はそのことを関わりのあった出版社に訴えた。その訴えは、ある日突然、タイトルもそのままに大学教授(当時)の名で、その出版社から刊行されるといふ経過を辿った。すると、あらためて男性の育児休業が世の中で取り上げられ、何よりも大きい成果は、各地方自治体が、それぞれのネーミングで「母子手帳」と並行して父親用の冊子を配布するようになったこと。

私は秘かに時代の求めるものを現場を通して感じ取る自分の視点に間違いは無かったという手応えを感じていた。以後「育児」が夫婦二人の協力で成

ないからだ！ どういう育て方をしてきたんだ」だった。子どもに何かあった時、こうした反応をする夫は今でも多い。

夫の方々にくれぐれも誤解してほしくないのは、社会や職場、男の論理は家庭や妻には通用しないということ。

「この仕事はキミに任せたヨ」と上司に言われる男性の心と「家事、育児はキミに任せるヨ」と夫に言われる妻の心を一緒にしないことだ。そんな風に夫に言われる妻は「魂の未亡人」になつたような孤独の淵に、つき落とされるだけである。

子どもに対する時の母親の心もちが、孤独ではなく、ゆつたりと優しく自信に満ちていることが、育児においてはとても大切なのだが、母親がこのような心でいられるために欠かせないのが夫の言葉、態度なのである。

妻の料理への「おいしいヨ」の一言や誕生日や結婚記念日など、夫婦の大事な日のバラの花の一輪などが、日々掃除、洗濯、炊事という日常に追われる彼女の心を「非日常」に運んでいく。こんな時に、妻は夫に気にかけれられ大切にされている自分を感じられるのだ。そうすると、昨日と同じ今日や、今日と変わらぬはずの明日という日に、優しい希望の光が見えたりもするのである。高価な宝石である必要

は無い。バラ一輪で良いのである。女性の心とはそうしたものである。相手に、その存在を大切に思われ、気にされていると感じる演出をコトバでも態度でも示されれば、主婦である妻も平凡に過ぎていく日常を生き生きとしたものに変えていける。これは女性にも子どもにも欠かせない、人間同士のつき合いのマナーなのだ。夫は知っておくべきである。

夫は妻をネグレクトの状態にしないことである。それが家庭における夫の役割である。そのことが、子どもに対して何よりも大事な「人を大事にする生きた導き」になっていく。

夫婦が仲良くやっていければ、父親の役割や母親の役割などを敢えて意識せずとも、子どもは黙っていてもスクスクと育つ。

子どもは、そのように生まれついている。

互いに相手への感謝や労りの心に満ちた夫婦の許で安定した心で育つ子は放つておいても非行という形の問題提起もしない（問題児とは、正確には問題提起のことなのだ）。

父親は男らしく、母親は女性的であれといった性的に固定化された役割を家庭の中で夫と妻が演じる必要も無い。知人のご夫婦で、夫は繊細で慎重、趣味は掃除、妻は豪胆、快活で

料理は苦手の一組がいるが家族は仲良しだ。どんな個性のカップル同士でも、理解し合い認め合っていさえすれば、家庭は滑らかに展開していく。妻が外で働き、夫が家事、育児を担うケースでも、立場は変わっても相手への思いやりが全てだ。

一つだけ、夫の側が忘れていけないことは、妻が痛みを引き受けて、自分の子を産んでくれたということへの感謝を持ち続けること。

私は、妻の幸せと、夫婦の良い関係の継続に欠かせないのが、この一点に集約されるということを取材を通して実感してきた。

相手の心に想像力を持つ

今年一月、ある新聞の人生案内のコーナーに「五〇年前の落ち度責める妻」というタイトルで、八〇代の男性からの相談が載った。内容はこの男性の妻が、もうすぐ出産という時期に「行かないで」と言う妻の願いを無視し、いとこの女性と映画を観に行き、帰宅が遅くなった。いとことは幼ない時から兄妹のようなものだが、妻はいまだに、その話を持ち出して自分を責める。耳にたこが出来るほど聞かされた。何とか平穏に過ごしたいが、どうすればいいか——というもの。この相談にも驚いたが、大学教授の回答は「五〇

年も責められ続けるのは大変だと同情し、夫にそうやって仕返しすることが妻の生きがいになっていくのだろうと続け、年齢から言っても、もう別居は無理だから、妻の性格と違ってあきらめるしかない。(中略) 妻は、夫を責めてストレス解消の手段にしているだけ。ボランティア活動だと思って受け止めよ」というもの。この回答者は、普段はなかなか人間的に深みのある意見を言う方なので、この回答には呆然、啞然とした。だが、おそらくこの回答は大方の男性の意見だと思う。そして、間違いなく全ての女性が、この「回答」や「八〇代の夫の姿」と「妻の心」の間に横たわる深い深い乖離に言葉を失い嘆息するだろう。

出産は乳歯が抜け落ちたり、切傷のカサブタが剥かれるのとは訳が違う。「産」と「棺」は、その音の響きから二つ並べられて、生死を賭けた大業なのだという意の諺もあるほど、それは女性にとつて緊張に満ちた、心細い、未知の人生の入口なのである。加えて女性にとつて「夫の子を産む」という行為は、女性として人生の「一大確認作業」なのだ。どんな確認か――。それは「人生をこの人に賭け、痛みを引き受けこの人の子を産み、この人と子どもの両親としてやっていくのだ」との確認である。

おそらく、この八〇代の夫は只の一度も「昔、ボクは若くて未熟だった。母になるあなたにも、生まれてくる子にも失礼なことをした。心から謝る」といったような形で、あらためてこの件について、自ら言葉に出し、きちんと向き合って詫びていないはずである。きちんと詫びれば妻の心の欠落が、そこで塞がれる。この妻が執念深いのも、しつこい性格なのでもなく母として命を賭けて新しい入口の扉を開ける時に扉の前に同じ思いで立ってくれなかった夫が情無く、無念なのである。女性にとつてそれほど「出産」は、ないがしろにできないことなのだ。夫は知っておくべきなのだ。

出産は、男性に分かり易く言えば、デスクワークしかしたことのない人間が、引き継ぎもリハーサルも無しに、いきなり命がけの現場職に単身で赴き、孤軍奮闘する行為なのである。この妻が長い間その話をむし返すのは、夫がその度に「謝ればいいんだろ!」といった様子で応じてきたからではなからうかと想像する。

介護の現場に向くと夫婦の歩んだ結婚生活の集約を見る思いがして、夫婦は共に、相手の心に想像力を持つ、という優しさの積み重ねが全てなのだと思わせられる。妻を労^{いたわ}ってきた夫は、老後、妻に大切にされている。

専業主婦は、働く同性と異なり自分の仕事の成果が、形として役職、地位に表れるとか給与に反映される等の分かり易いものではない。だからこそ客観的な「評価」としての夫からの感謝の一言(料理への称讃や家事への労いなど)が労働への自己肯定感に直結するのである。

浜文字先生が執筆された本

「母になったあなたに贈る言葉」

(清流出版)

出産と子育ての日々から生まれた詩とエッセイ。「子育て」って、こんなに自然なものだった!子どもと共に生きることがますます楽しくなる魔法の本。

